故郷（1）

　きびしい寒さのなかを、※二千里のはてから、別れて二十年にもなる故郷へ、私は帰った。
　もう真冬の候であった。そのうえ故郷へ近づくにつれて、空模様はあやしくなり、冷たい風がヒューヒュー音を立てて、※船のなかまで吹きこんできた。※苫のすき間から外をうかがうと、鉛色の空の下、わびしい村々が、いささかの活気もなく、あちこちに横たわっていた。①おぼえず寂寥の感が胸にこみあげた。
　ああ、これが二十年来、片時も忘れることのなかった故郷であろうか。
　私のおぼえている故郷は、まるでこんなふうではなかった。私の故郷は、もっとずっとよかった。その美しさを思いうかべ、その長所を言葉にあらわそうとすると、しかし、その影はかき消され、言葉は失われてしまう。やはりこんなふうだったかもしれないという気がしてくる。そこで私は、こう自分に言いきかせた。もともと故郷はこんなふうなのだ――進歩もないかわりに、私が感じるような寂寥もありはしない。そう感じるのは、自分の心境が変っただけだ。なぜなら、②こんどの帰郷はけっして楽しいものではないのだから。
　こんどは、故郷に別れを告げに来たのである。私たちが長いこと※一族で住んでいた古い家は、今はもう他人の持ち物になってしまった。明け渡しの期限は今年いっぱいである。どうしても旧暦の正月の前に、住みなれた古い家に別れ、なじみ深い故郷をあとにして、私がいま暮らしを立てている異郷の地へ引っ越さねばならない。
　あくる日の朝はやく、私はわが家の表門に立った。屋根には一面に枯草の※やれ茎が、折からの風になびいて、③この古い家が持ち主を変えるほかなかった理由を説きあかし顔である。いっしょに住んでいた親戚たちは、もう引っ越してしまったあとらしく、ひっそり閑としている。自宅の庭さきまで来てみると、母はもう迎えに出ていた。あとから八歳になる甥の宏児も飛び出した。
　母は機嫌よかったが、④さすがにやるせない表情は隠しきれなかった。私を坐らせ、休ませ、茶をついでくれなどして、すぐ引っ越しの話はもち出さない。宏児は、私とは初対面なので、離れたところに立って、じっと私のほうを見つめていた。
　だが、とうとう引っ越しの話になった。私は、あちらの家はもう借りてあること、家具も少しは買ったこと、あとは家にある道具類をみんな売りはらって、その金で買い足せばよいこと、などを話した。

（竹内好訳『魯迅文集Ⅰ』筑摩書房　所収「故郷」による）

※二千里…今の中国の一里は約五百メートル。ここでは遠い距離を表している。
船…魯迅の故郷である浙江省などでは水路が多く、水運が発達している。
苫…スゲ・カヤなどの草を編み、舟や小屋などにかけて雨露をしのぐもの。
一族…大家族制度では、血縁のある数家族が集住し、共同で生活する。
やれ茎…折れ、しなびた茎。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「おぼえず寂寥の感が胸にこみあげた」のはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア 真冬の帰郷だったため、あまりに寒さが厳しかったから。
イ 故郷が、記憶にあるものに比べあまりにわびしかったから。
ウ 片時も忘れることがなかった故郷にようやく到着したから。

〔　　〕

(2) ——線②「こんどの帰郷はけっして楽しいものではない」とあるが、なぜこんどの帰郷は楽しいものではないのか。適当なものを選びなさい。

ア 厳しい寒さの中を、二千里も離れた地から帰郷したから。
イ 故郷が、覚えていたものとあまりにも違っていたから。
ウ もともと故郷は進歩のないものだと思い知らされたから。
エ 家を明け渡し、故郷に別れを告げるための帰郷だから。

〔　　〕

(3) ——線③「この古い家が持ち主を変えるほかなかった理由を説きあかし顔である」とはどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア もう「私」の親戚が引っ越してしまったことが、家屋からわかるということ。
イ 家を明け渡さねばならないわけが、家屋の様子からわかるということ。
ウ 心情の変化のために、故郷の屋根の見た目も違って見えるということ。

〔　　〕

(4) ——線④「さすがにやるせない表情は隠しきれなかった」とあるが、このときの母の心情として適当なものを選びなさい。

ア 故郷が変わってしまったことを、つらく感じている。
イ 「私」に、引っ越しを打ち明けることをためらっている。
ウ 住みなれた家を離れなければならず、せつなく思っている。

〔　　〕

(5) 本文を時間の変化に注目して二つの場面に分けたとき、二つ目の場面はどこからはじまるか。最初の三字を答えなさい。